



2013 年 (平成 25 年)
12月号 (No. 823)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

平成25年度年次晩餐会開く	
200人を超える新人迎え賑やかに懇談	1
アウトライアー・東峰初登頂への道	4
立山連峰における越年性雪渓研究 及び日本初の現存氷河の発見	4
日本人初8000m峰14座完全登頂	5
登山道調査の取組み状況	6
アラスカ・マッキンリー気象観測の再開に向けて	7
追悼 名誉会員 孫慶錫さんを偲ぶ	9
活動報告	10
集会委員会／資料映像委員会	
図書受入報告	10
支部だより	12
越後支部／東京多摩支部／ 福岡支部	
図書紹介	14
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
新入会員	18
日本山岳会蔵資料紹介 No.8	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時
年末年始休室 12月28日～1月5日

平成25年度年次晩餐会開く 200人を超える新人迎え賑やかに懇談

■466人が出席

平成25年度の年次晩餐会が、12月7日、東京・品川の品川プリンスホテル・アネックスタワーで開催された。お忙しい公務のなか皇太子さまが出席されたのをはじめ、全国から466人の会員が集い、歓談した。参加者は昨年と比べ40人近く増加した。新入会員は213人と、2年連続して2000人を超えた。講演会では、日本人で初めて8000m峰14座を完全登頂した竹内洋岳さんが講演した。

■会長挨拶

会場には52のテーブルが並んだ。

いつものように「富士山」、「北岳」などの山名がつけられた。森武昭会長は、今年6月に会長に就任し、初めての晩餐会を迎えた。皇太子さまのご出席を喜ぶとともに、次のように挨拶した。

一・会員増強とリーダー育成が課題だ。YOUTH CLUBが成果を発揮しつつあり、支部は7月に群馬支部が創立され32となった。2年後に会の創立110周年を迎える。記念の海外登山を、ピオレドールを狙える登山、学術調査登山などを実施したい。

一・「山の日」制定に向けて進展があった。流れは2つ。国会議員連



皇太子さまをお迎えして恒例の鏡開き

盟が8月11日を「山の日」と定め、国民の祝日とすることを決めた。通常国会に議員提案として法案を上程する。また、新たな協議会が発足した。山岳5団体だけでなく政財界も一緒になって組織した。会員を募り募金活動を行なう。協力してほしい。

■新永年会員は46人

物故会員に対し黙祷した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は66人。名誉会員の史占春さん、朝比奈英三さん、室賀輝男さん、孫慶錫さん、また資料映像委員会の生き字引だった羽田栄治さん、岩登りのエキスパートで関西支部長を務められた阿部和行さん、会の女性登山普及に貢献された早川瑠璃子さんが帰らぬ人となられた。心からご冥福をお祈り申し上げます。

新しい永年会員は46人。1963年4月から翌年3月までに入会し、以降継続して50年間、活躍された会員および復活会員。27人が出席し、スタッフがそれぞれの会員席に向き会員章を手渡した。入会された年の1月には、薬師岳で愛知大生が大量遭難した。6月

に黒四ダムが完成。11月にケネディ米大統領が暗殺された。三井三池炭鉱で戦後最大の炭鉱事故があった。激動の時代だった。高度経済成長の真ただ中にあった。

新永年会員(会員番号順)

筑木力、木村俊博、小須田喜夫、中里巖、池元善秋、高遠宏、田中元、鈴木恭一郎、安藤久男、宮下秀樹、大川豊、本間宏之、佐野孝、白井久夫、羽賀育子、安間莊、山田圭一、小林孝次、塚崎義人、浅見守、南雲克良、高木泰夫、大山孝一、麻生国雄、鈴木昭、村田進、岩間弘雄、石原達夫、清水日出勇、小澤武麿、渡辺文明、菰田快、大田邦介、野田耕一郎、中川武、大倉昌身、清水芳美、山寺義雄、添田啓一、本田卯太郎、小野貴司、米川正利、小野健、向後元彦、小野龍彌、早川渥

新永年会員を代表し、高遠会員が挨拶した。長年にわたって『山岳』の編集、また常務理事などを歴任された。「当時は、山岳会ができたばかりの初期の会員が健在で、いろいろな話を聞く機会があった。ルームの移転という問題があった

が、みんなの協力で乗り切った」などと振り返った。

■秩父宮記念山岳賞

第15回秩父宮記念山岳賞は、学術分野から1件、登山分野から1件の計2件。学術分野は、飯田肇会員と福井幸太郎さんの共同の業績で「立山連峰における越年性雪渓研究および日本初の現存氷河の発見」だ。登山分野からは竹内洋岳さんが「日本人初8000メートル峰14座完全登頂」で受賞した。

表彰式が行なわれた。飯田会員は「氷河というのは、なんとロマンのある言葉だろう。12代会長の今西錦司先生が剣沢で、雪が氷になった氷体を発見された。これがきっかけとなって研究が進展した。もしかすると、あと少し増えるかもしれない」と、語った。

竹内さんは「皇太子殿下のご臨席のもと、秩父宮殿下の名を冠した名誉ある賞をいただき緊張している。賞は、山の先輩から登山という歴史と文化を引き継いだものと思っている。とどめることなく発展させ、次の世代に引き渡していくよう努力したい」などと語った。

■新入会員は213人

続いて新入会員の紹介。今年は213人が新しく会員に加わった。昨年に続き2000人を超える新入会員を迎えることができた。うち33人が出席。代表して富重友佑会員が挨拶した。27歳。「両親の影響で山登りを始めた。これを通じ、さまざまな教えや生き方を学んだ。山は素晴らしい、人生そのものだと思う。伝統と格式のある日本山岳会に入会させていただいた。山と自然を探求し、山の素晴らしさと感動を、ともにあじわっていききたい」と入会の喜びを語り、大きな拍手を誘った。

恒例の鏡開きは皇太子さま、森会長のほか、秩父宮記念山岳賞を受賞した飯田会員、福井さん、竹内さん、そして「全国『山の日』制定協議会」会長を務める谷垣禎一会員の6人で行なった。お酒は故今西壽雄名誉会員の芳子夫人から寄贈のあった「四海王」。田邊壽会員の音頭で乾杯し、会食が始まった。

■全国32支部を紹介

全国支部から多くの会員を迎えた。会食をはさんで32支部の活動が、北から南へと紹介された。参加者は紹介されるたびに立ち上が

り手を振った。恒例のイベントだ。北海道は、オホーツク分水嶺の踏査を実施中、今年、知床岬に到達した。青森は、10月に創立20周年を迎え支部発祥の地・むつ市で盛大な式典を開催。埼玉は、来年、全国支部懇談会を主管、両神山に登る。千葉の房総半島分水嶺踏査が終了した。越後の高頭祭は1000人を超える盛会だった。信濃のウェストン祭は67回を数えた。

静岡は29回の全国支部懇談会を実施した。関西は700キロに及ぶ府県分境嶺を踏査し200キロを終えた。広島は念願かなって支部ルームが本格稼働。四国は第1回小島島水祭を実施。北九州も5月に支部ルームを開設した。

■皇太子さまの写真を飾る

本年も図書委員会主催の図書交換会が開催された。過去最高の700点の山岳書がテーブルに並ぶ姿は圧巻で、そのまま山の本の歴史をたどるようだった。

本を選ぶ参加者の眼も真剣そのもので、やはり人気本には申込みが殺到した。参加者の熱気が伝わったかのように、今年も9割の本が、新しい読者の手元で甦ること

ができたのは幸いだった。

同じく図書委員会主催の、稀観本『シュラギントワイト・アトラス』の展示が多くの目を引いた。ドイッ・バイエルンの名門シュラギントワイト家の3兄弟が、1854年から58年にかけて、インドからヒマラヤ高地を調査した報告書が『インドおよび高地アジア学術調査報告書』、その別巻が『アトラス(図版集)』である。

写真展・図書交換会会場の入口に皇太子さまの写真「黎明の富士」が飾られた。北岳山頂からの富士を望んだ作品だ。35ミリフィルムで撮影されたという。デジタル処理し全倍の大きさに引き伸ばした。まさに明けようとする東の空に富士のシルエットが浮かびあがった。

■懇親山行は平塚・湘南平で

翌日の懇親山行は集会委員会が主催し平塚市の湘南平で行なった。曇りがちで少し肌寒かったが、ハイキングにはちょうどよい。日本山岳会設立に貢献した岡野金次郎のレリーフの前で、会の歴史を学び先輩たちの活動に思いを馳せた。森会長ら総勢70人が参加した。

(写真・澤村貴和、文・高橋重之)

三好まき子)

全国支部長会議開く 会員増強、リーダー育成図る

晩餐会に先立ち、午前10時30分から品川プリンスホテルで平成25年度第2回支部長会議を開いた。会議には全国31支部の支部長、執行部からは森会長をはじめ節田重節、黒川恵、古野淳副会長らが出席した。森会長は「会の喫緊(きんきん)の課題は若手会員増強と次期リーダー育成である。支部については、活動内容の充実に重点を置きたい」などと挨拶。あらかじめ依頼していたアンケートをもとに会員増強などに向けての具体策を話し合った。

■会務報告

●110周年記念事業 記念事業実行委員会委員長・尾上昇前会長)から第1次答申をいただいた。海外登山は、さまざまなレベルでの登山を実施したい。「日本三百名山登山ガイドブック」に沿って歩くことも検討している。

●日本山岳協会・東京都山岳連盟との新たな関係 公益法人化に伴って、改めて日本山岳協会からJACの日山協への加入を検討して

ほしいとの話があった。評議員懇談会、理事会の意見を踏まえて検討した結果、加盟でなく連携強化して共通課題に取組むことにした。これに伴い都岳連から退会する。各支部と岳連の関係は疎密であり、それぞれの事情で対応してほしい。

●税額控除制度 10月15日付で税額控除適用法人として認可された。これによりJACへの寄付について、所得控除よりメリットが大きいい税額控除の適用可能となる。

●YOUTH CLUB 登山者が増えており、受け入れ組織となつて成果をあげつつある。40歳未満が参加。国立登山研修所前進基地を年2回使えるようになった。

■意見交換

会務報告に続いて支部活性化報告と、それにもとづく意見交換があった。会員増強と若手リーダー育成に絞って進められた。

北海道支部からは、次期リーダー育成の事例が紹介された。2007年の雪崩事故を契機に道内3カ所で雪崩講習会を実施。これを機に岳連との関係も安全登山等で連携強化した。東京多摩支部は都県分境嶺踏査を実施し、一般参加者から11

人が入会した。初心者・初級登山教室を継続実施している。東海支部は、会員以外に支部友50、東海ユースクラブ25、東海学連(15大学100人)、猿投の森つくり会員100人と、延べ275人在籍し、正会員と合わせ606人の規模となっている。

関西支部は、ゆるやか山行、登山教室初級・上級を実施し、一般参加者を会員・会友に誘導している。広島支部の会員163人の50%は中国新聞文化センター出身者だ。支部活動の中核となっている。

岐阜支部は、山行がツアー登山化しているので、参加者自ら計画を立て、責任あるリーダーを擁するパーティ形式を取り入れた。茨城支部は講演会を隔月で実施している。この結果、会員は21人で発足し36人になった。50人が目標。

これらの報告に対して、執行部から「若手リーダー育成に一般の人を巻き込む活動には教室開設が有効かと思う。こうした企画を推進するための装備、旅費等の補助を認めたい。リーダーのリーダーを育成するための支援は支部活性化PTで考える。入会のネックとなる入会金の取扱いについても検討する」などと語った。

講演会

アウトライアー東峰初登頂への道

青山学院大学山岳部 萩原浩司

9、10月に行なわれた青山学院大学山岳部によるアウトライアー東峰(ジャナクチュリ)の登山について、登山隊長を務めた、青山山岳部OB会会長の萩原浩司さんから報告があった。

アウトライアーは、ネパール東北部、カンチエンジュンガの北西に位置し、中国チベット自治区との国境にそびえる7090メートルの未踏峰だ。2000年からスロヴェニア隊が試登と敗退を重ねた末、06年にアウトライアー西峰(主峰)は登頂されたが、東峰は未踏のままだ。青学隊にとっては、



萩原登山隊長(左)と5人の隊員たち

10年以來2度目のトライである。

メンバーはOBが3人、現役部員が3人の合計6人。カトマンズからネパール東部にある紅茶の産地イラムを経て、タブレジュンまで車で移動。その後キャラバンで北上し、アウトライアーの姿を目にできたのは、日本を発つて19日目のことだった。長いアプローチであり、その分、トレkkerや登山者もほとんどいなくて、静かな山歩きとなった。ブローケン氷河は、10年の青学隊以来、誰も足を踏み入れていないと言われている。10年は、南西壁6700メートル地点までルートを開いたが、雪壁のコンディションが不安定で、行く手を阻まれた。今回も、南西壁右端のガリーから山頂を目指した。C2以上は、急峻でヒマラヤ壁のある雪壁、さらには岩壁とのコンタクトラインをねらったミックス壁となっていく。C3から山頂を目指す、1度目は届かず、翌日再びアタックし、OB2人、現役部員4年生の3人が登頂した。

山頂までは天候が持ちこたえなかったが、下山に入るとガスがたちこめ、一変した。なんとかその日のうちにC2まで下山したが、BC帰着後も降雪は続き、バックキャラバンは、「まるで雪の穂高稜線」とい

秩父宮記念山岳賞へ

立山連峰における越年性雪渓研究及び日本初の現存氷河の発見

飯田肇、福井幸太郎(立山カルデラ砂防博物館)

飯田肇さんは、1982年から北アルプスの雪渓や積雪の調査を続けており、2009年からは今回の現存氷河発見に結びついた立山連峰の雪渓の調査を、福井幸太郎さんとともに始めた。

講演は、氷河の研究において、日本山岳会12代会長でもある今西錦司さんが33年に剣沢で行なった研



飯田肇会員(左)と福井幸太郎さん

った箇所もあるほど、大変なものとなった。

講演会には、全隊員が参加。サミッターのひとりである4年生の本田優城さんが撮影編集したショートムービーも上映された。

究が先駆的存在であることの紹介から始まった。次に越年性雪渓や氷河の定義づけについて。越年性雪渓は、積雪量が多いために、雪渓が越年して残り続けるものという。氷河は、「重力によって長期間にわたり連続して流動する雪氷体」(日本雪氷学会編『雪と氷の辞典』、2005年)と定義され、厚い氷体を持ち、氷体が流動していることがその条件となる。さらに、立山連峰が世界的に見ても、いかに豪雪地帯であり、越年性雪渓が発達する環境にあるのかという説明があった。その越年性雪渓のなかに、氷河は現存していないのだろうかという問いかけが、今回の研究のきっかけとなったのだ。

講演の後半では、今回日本初の現存する氷河であると学術的に認められた「小窓氷河」「三ノ窓氷河」「御前沢氷河」の調査内容とそれぞれの規模や特徴について説明があった。調査は、北方稜線など一般ルートから外れた所に及び、長時間にわたって雪渓を移動したり、クレバスに潜ったりするため、山岳ガイドの協力のもと行なわれている。剣岳にある小窓雪渓と三ノ窓雪渓では、11年にアイスレーダー観測(氷体の厚みを観測)を行なった。その結果、厚さ30メートル以上、長さ900～1200メートルに達する日本最大級の長大な氷体が確認された。また高精度のGPSを使った

流動観測(ボーリングしてポールを雪渓に埋め込み、ポールの頭にGPSを設置)では、1カ月間に最大30センチ以上の比較的大きな流動が観測された。

立山東面にある御前沢雪渓では、09年にアイスレーダー観測を行ない、雪渓下部に厚さ27メートル、長さ約400メートルの氷体を確認。流動観測では、1カ月あたり10センチ以下の流動が認められた。

両氏によると、剣岳・立山連峰のほかの越年性雪渓にも、氷河が現存する可能性が残されており、特に内蔵助雪渓や池ノ谷右俣などは、今後も観測、調査を続けていくそうだ。

秩父宮記念山岳賞(2)

日本人初8000メートル峰14座完全登頂

プロ登山家 竹内洋岳

最後は昨年5月にダウラギリに登頂し、日本人初の14座サミッターとなった竹内洋岳さん。

「以前、皆さんの周りには登山家と呼ばれる人が大勢いたでしょうが、最近は見なくなつたなあと思いますか」という話しかけで始まった。プロ登山家の竹内さんは、

自身を天然記念物クニマスに例え、「今日、皆さんの前に、こうして登山家が再び現われましたが、もしクニマスが言葉を話せたら『なかなか生き延びるのが大変でした』と言うでしょう。私も大変でした」と会場を沸かせた。

標高8000メートルへと向かう生物

は、アネハヅルとインドガンと人間しかない。鳥たちは仕方なく8000メートルを越えていくのかもしれないが、私たちは自らの意思で8000メートル峰に足を踏み入れていく。そのことはまるで、生物が数億年かけて陸に上がった歴史を再現しているかのようだ、と竹内さんは言う。陸に上がると苦しくてまたすぐに水中に戻った。しかし、もう一度陸に上がってみる。少しずつ活動範囲を広げていった生物の歴史と、高所登山で人間が低酸素に身体を順応させていく様には、共通点があると。だから竹内さんは、8000メートル峰登山は生物体としての可能性を探る行為だと考えているようだ。

後半、2007年にガッシャブルムⅡ峰で大規模雪崩に遭ったときの話に及んだ。雪崩のリスクが少ないラインを採っていたつもりが、雪崩に巻き込まれた。それは自分の想像力が、この山に及んでいなかったのだと、雪崩に流されながら思い、とても悔しかったそう。

居合わせた各国のクライマーたちの献身的な救助、手当によって、一命を取り留める。しかし、山に

登る者ならばわかる。あの事故からは到底生還できないはずだ。自分は生き残ったのではない。今ある自分の生命は、救助してくれた人たちの生命、そして犠牲になり死亡した仲間の生命すらからも、少しずつ分けてもらったのだ、と。そうであれば、絶対に1年以内にGⅡ峰に戻って、「私は生きています」ということを、皆に伝えなければならぬ、と考えた。みごと竹内さんは、1年後にGⅡ峰に帰っていく。それは「今までの登山の連鎖のなかに自分を引き戻すことだった」と言う。

14座達成は、けっして自分ひとりで成し遂げたものではない。今まで出会い関わってきた人たちが一人でも欠けたら、登れなかった、と締めくくった。(構成 柏澄子)



8000メートル峰14座完全登頂を語る竹内洋岳さん

Report

登山道調査の取組み状況

国土地理院対応WG 佐藤 守

登山道調査の概要

国土地理院では、登山道の正確な位置と状況を測量調査し、国土地理院の地図などに反映させ登山者の安全・安心の確保と地域の振興を図る目的で、登山道が所在する市町村および山岳関係者との連携により「登山道調査」を実施しています。

日本山岳会では、国土地理院が整備する地図における登山道情報の正確性を維持・向上させるため、国土地理院測図部との間で協定を結び、全国の主要な登山道に関する情報交換を行なっています。

具体的には、GPS等の測量機器を用いて取得した登山道の位置データなどを、当会から国土地理院に提供し、国土地理院はこれに基づいて廃道となっている登山道の情報を地形図から削除し、あるいは新たに登山道情報を地形図上に表示するものです。

日本山岳会の取組み

地形図に正確な登山道の表示を

行なうことは、道迷いなどの事故から登山者を守ることにつながります。地元市町村や他の山岳団体などと連携して登山道調査に取組むことは、公益社団法人としての日本山岳会にとっても相応しい事業と言えます。

日本山岳会からの情報提供に基づく、地形図の修正例

以下に日本山岳会から情報提供を行ない、国土地理院の地形図に反映された事例を紹介します。なお「」内は、調査時期および調査者です。

◆武甲山〔平成23年4月・埼玉支部・遠山元信〕

登山道が変更されて地形図との差異が著しいため、生川・武甲山間の登山道を修正しました(図1、図2)。

◆二子山〔平成23年5月・埼玉支部・遠山元信〕

芦ヶ久保駅・富士浅間神社・雄岳コースについて、地形図に記載

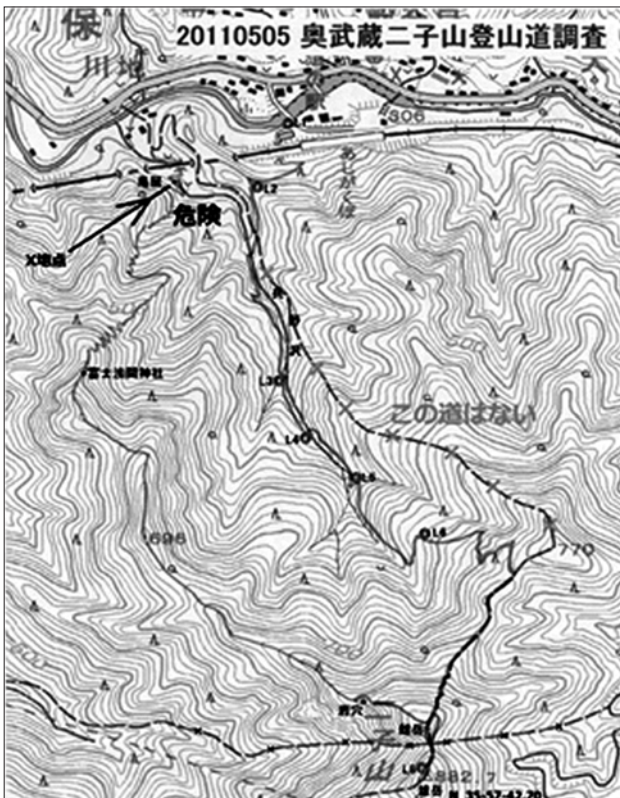


図3 指摘した登山道変化情報 二子山

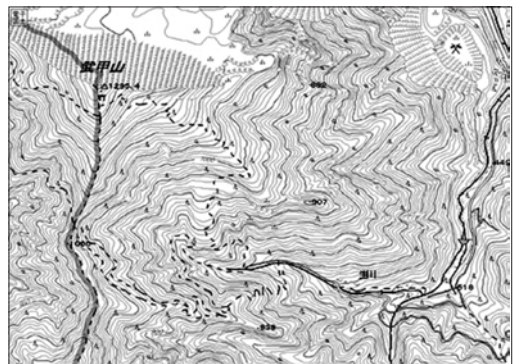


図1 修正された地形図(電子ポータル) 武甲山

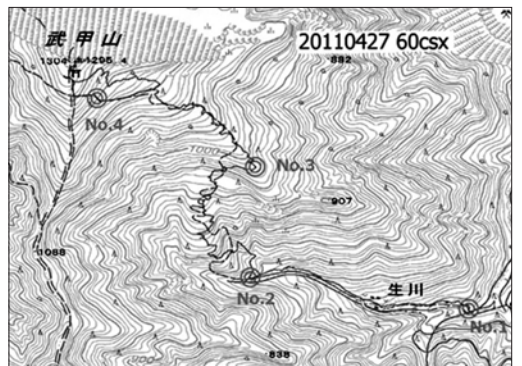


図2 指摘した登山道変化情報 武甲山

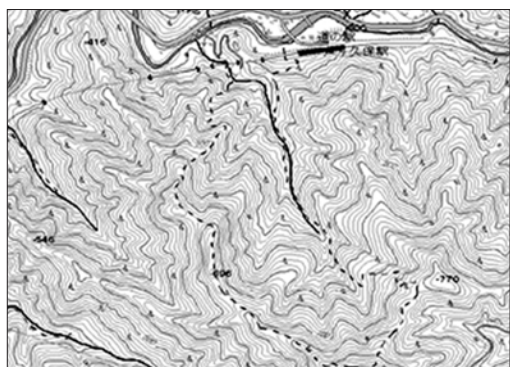


図4 修正された地形図(電子ポータル) 二子山

がなかったため新たに記載しました(図3)。また芦ヶ久保駅へ兵ノ沢く雌岳ルートについては、地形図との差異が著しいため修正しました(図4)。

◆雲取山(奥多摩)「平成25年5月・東京多摩支部・宮崎紘一」大ダワ林道について、登山道が崩壊し通行止めとなり、死亡事故も発生しました。今後、登山道補修の予定もないとのこと、削除しました。

◆天目山(奥多摩)「平成25年5月・東京多摩支部・宮崎紘一」倉沢く1289^{メートル}ピークの間の登山道について、10年以上前から登山道としての形状がなく廃道と

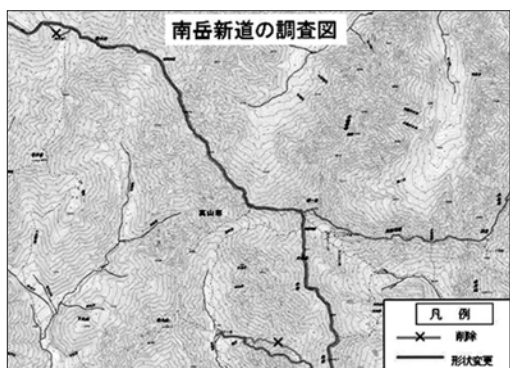


図5 修正された地形図(電子ポータル) 南岳新道

なっているため、削除しました。

◆南岳(飛騨山脈)「平成25年9月・東海支部・鈴木慎吾、伊藤康信」槍平く南岳山頂までの登山道について、現在一般的に使用されている「南岳新道」が地形図上に表示されていませんでしたので、これを表示しました(図5)。

今後も、国土地理院から日本山岳会へ、登山道調査への協力要請が見込まれます。これに対し、本部と支部が連携して取り組んでいくことが求められています。

Report

アラスカ・マッキンリー気象観測の再開に向けて

マッキンリー気象観測WG担当理事 吉川正幸
第1次観測までの経緯

1984年の冬、植村直己会員はアラスカ・マッキンリー峰(標高6194^{メートル})を冬季単独初登頂後、消息を絶った。烈風による気象遭難と考えられている。当時、北極圏に近い高峰では、どのような超低温のジェットストリームが吹きささぶものか、気象観測も行なわれておらず、想像することもできなかつた。

植村直己会員、およびその3年後の日本人登山家の冬季のマッキンリー峰遭難事故を契機として、マッキンリー峰の高山における気象観測が重要と考えた大蔵喜福会員は、日本山岳会や諸団体の支援を得て90年からマッキンリー峰の5715^{メートル}地点に定点観測機器を設置した。

以来、11年続けて隊を派遣して、11年間に及ぶデータを集めた第1期の観測は、2000年6月に一区切りをつけた。

第2次観測と共同研究体制

自動気象観測機をマッキンリー峰に設置しての、第2期の気象観測は、アラスカ大学・国際北極圏研究センター(IARC)との共同研究として、NSS(米科学協会)からの援助も得て継続してきた。年々改良を重ねた自動気象観測機によって得られたデータの解析は、IARCおよびアラスカ大学の研究者によって行なわれてきた。

しかし、実際にマッキンリー峰の高山に気象観測ステーションを設置する作業は、第1期から引き続き、日本山岳会の大蔵喜福会員の個人的な努力によって行なわれてきた。大蔵会員のこの努力に対して、日本山岳会は秩父宮記念山岳賞を授与した。

しかし、デナリ(マッキンリー)国立公園における環境保全の強化のため、観測機器設置の制約が行なわれたこと、および日米の経済悪化に伴う支援団体や企業の寄付

の継続の困難さから、第2期の気象観測は2010年に至り観測の中断を余儀なくされた。

第3次気象観測の再開に向けて

20年間継続した高所気象観測は、北極を中心とするジェットストリームの跛行現象の解明に寄与したといわれる。しかし、世界にも稀に見る高所、かつ北極圏における気象観測は、さらに長期間継続してデータを収集することによって得られる知見があると考えられる。IARCはこれらの観点から、また10年間の共同研究の実績から、日本山岳会および大蔵喜福会員の観測再開計画に対して、全面的な



気象観測ステーションと現地のスタッフたち

支援・協力を約束している。

12年からは、第3次の気象観測再開のため、IARCを中心にして地元デナリ国立公園レンジャーの協力や機材設置作業への参加を求める組織体制を企画したところである。つまりマッキンリー峰の高所に気象観測ステーションを設置する作業に、大蔵会員だけでなく、デナリ国立公園レンジャーが加わることを提案している。また大蔵会員による役務提供だけでなく、資金的にも、国内企業による資金援助とアラスカ大学の研究費を受けて実施することを予定している。

13年と14年の再開準備の状況

以上のように、13年からの気象観測の再開に向けての活動を開始した。

しかし、13年6月の登山シーズンには、地元におけるマッキンリー峰登頂百周年記念登山等の行事があり、そのあとデナリ国立公園局による環境アセスメントを行なう必要があるとして、IARCからの調査申請に対して、国立公園局の気象観測機器の設置許可が下りなかった。

これには、米国の国内事情から

国立公園局の運営に支障が出ていることや、国立公園局による自然保護強化策や地元登山ガイド振興策による影響もあると推測される。

また、電源開発株式会社から観測機材の購入費用の寄付金を得たものの、準備期間が短かったため6月の登山シーズンまでに、IARCと調整の上での発注ができなかった。

このため現在も、14年の再開に向けてIARCおよびアラスカ大学から国立公園局への働きかけを重ねている。観測機材の購入についても、IARCからの発注が確定して来シーズンの再開のめどが立った。今後の課題は、継続的な観測を行なうための日本山岳会の支援体制の整備であろう。

【参考】

◆ IARC (International Arctic Research Center) について

アラスカ大学フェアバンクス校にある国際北極圏研究センター(IARC)は、グローバルな視点から、北極圏が地球全体に及ぼす影響と役割を明確に把握すること、また北極圏をシステム(体系)として統合的に理解することによって、

米国と日本を含めた北極圏研究に携わる世界各国・地域に貢献することを目的としている。

IARCは、初代所長であり、アラスカ大学教授(現名誉教授)である赤祖父俊一氏の提案によって、日米政府の資金提供を受け、1999年に日米間の共同研究推進を目的として設立された。

研究費は、日本側からは海洋研究開発機構(JAMSTEC)および宇宙航空研究開発機構(JAXA)、米国側からは米国立科学財団(NSF)および米国海洋大気局(NOAA)より、直接支援を受けている。

世界各国の20以上の研究所、60人を超える科学者との共同研究を通じて協力、お互いの理解を深め、センターの目的(上述)を果たす努力を行なっている。

※ IARC のホームページより抜粋 (2013年9月)





孫慶錫 (ソン・キョングソク) 会員No.7775

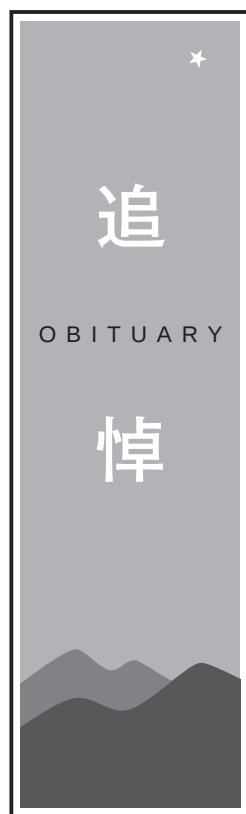
1926年 9月2日韓国・ソウル市に生まれる。
1945年 ソウル大学山岳部と韓国山岳会の設立に参画。
1950年 朝鮮戦争に参戦。
1955年 雪岳山千仏洞冬季初登。
1965年 訪日登山隊隊長(穂高連峰)。
1970年 訪日登山隊隊長(穂高連峰)。
1974年 日本山岳会入会。
その後ヨーロッパアルプス、ヒマラヤなどに足跡を残し、韓国山岳会副会長、UIAA韓国代表、アジア山岳連盟韓国代表などを務める。山に関する著書多数。
1994年 日本山岳会名誉会員に推挙される。
2013年8月31日逝去。享年87。

名誉会員 孫慶錫さんを偲ぶ

長尾悌夫

韓国から一通の封書が届いた。孫慶錫名誉会員のお嬢さんからで、父親の訃報だった。本年1月、癌を告知されたが延命を望まず一切の抗癌治療を拒否したと聞いていたので、この日を予期していたがついに現実になってしまった。孫さんと日本山岳会の関わりは、お茶の水にルームがあったころに遡る。孫さんがベルリンオリンピック

ツクのマラソンの金メダリスト、孫基禎氏の手引きで来室した。応対したのは折井健一、関口周也両氏。1945年設立の韓国山岳会の中心人物の一人であり、設立後日が浅かった韓国山岳会が、日本山岳会の組織や運営などを参考にしたかったのではないだろうか。日本山岳会がエベレスト登頂に成功した70年は、ちょうど韓国山岳会創立25周年にあたり、その記念式典に招かれて隊員だった広谷大森両氏と関口氏がNHKのフイ



ルム持参で訪韓した。その時に世話してくれたのが孫さんだった。71年に孫さんの肝入りでソウルで日韓高所医学セミナーが開催され、本会から住吉、中島、広谷、大森、関口、長尾が参加した。このセミナーはその後ソウルで一度、大邸で一度開催され、すべて孫さんの手配だった。彼は大変面倒見が良く、訪韓した日本の岳人の多くが孫さんの世話になった。私もソウルでは何度も自宅(後にソウル市の文化財に指定)に招かれ、竹田、広谷、大森、長尾の4夫婦とは、韓国の正月を体験させてもらったこともあった。孫家は誇り高き両班^{ヤンビン}であり、祖父は日韓併合に反対して割腹自殺し、胸像がソウル市にあるという家柄だが、本人は大の親日家で、桜が咲く春の日本をこよなく愛し、しばしば来日した。TVはNHKばかり見るので、お嬢さんに書斎の扉に「NHKソウル支局」と貼り紙された、と笑っていた。ソウル大学政治学科の卒業だが、政治に直接関わったことはなく、登山と著述業に明け暮れた。山に関する著書が多く、また大変な蔵書家で、その数は2万冊に及ぶと言ってお

り、自分の死後の本の始末について相談されたことがあった。日本と韓国の登山界の架け橋的な存在であり、韓国山岳会副会長、UIAAやアジア山岳連盟の韓国代表を務めるなど一生を韓国登山界に捧げたと言っても過言ではないだろう。日本山岳会名誉会員に推挙された時はいそう喜び、書斎に飾りたいから名誉会員章はバツジではなく額にしてほしいと神崎副会長を困らせたこともあった。晩年は、心疾患の手術や下腿骨骨折など体調を崩すことが多く、そのたびに体力が衰えた。癌告知後も春には訪日したいと書いてきたが遂に叶わず、8月31日、逝去された。半世紀近い交遊を偲びつつ謹んでご冥福をお祈りします。終わりに、ご子息からの来信の一部をご紹介します。

「今、故人は遺言どおり靈魂石になり、彼が最も愛した山岳関連の本、資料、写真と共に自宅の書斎に安らかに眠っています。

故人の心を奪った山に対する嫉妬で生前故人に無関心だった遺族らはその罪を償おうと、これから故人の傍らで追慕と哀悼を始めようとしています」。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

集友委員会

南アルプス——荒川岳—— 赤石岳縦走

9月27日14時、畑薙夏期駐車場に集友委員会2名、北海道支部5名(女性3名、男性2名)、私の計8名が集合。送迎のマイクロバスに揺られて二軒小屋へ向かう。

28日8時、朝食後、ゆつくりと出発。千枚岳コースの吊り橋は数年前に流され、下流に新しい吊り橋ができていた。取付から急登の連続。チーフリーダーは菊池武昭さん、続いて北海道支部5名と私、サブリーダーは清登緑郎さん。マンノ沢ノ頭までは4時間の急登。私は呼吸困難となり、徐々に足が止まり遅れ出すが、清登さんの「ゆつくり行こう」の励ましもあり、なんとか千枚小屋に着いた。

29日4時30分、ライトを頼りに小屋を出発。5時30分、千枚岳頂

上にてご来光。富士山の左に昇る太陽をカメラに収め、記念写真を撮る。雲一つない素晴らしい眺めに感激。丸山の登りも快適、岩稜帯を登り東岳(悪沢岳)の山頂へ。南部の最高峰からの360度の展望に感激。角度の関係で北岳のみ見えなかったが、白峰三山から光岳まで尾根筋が展望できた。ここまで登ると、秋の訪れの草紅葉が素晴らしい。急坂のガレを下り、中岳、前岳へ。

8名での行動はここまで。この後、私が大聖寺平で遅れ出したため、赤石岳頂上にて合流することにした。頂上にたどり着けるのか不安であったが、30分遅れで登頂できた。40年来の夢の実現、諦めかけた赤石岳の登頂に感激。1時間遅れで赤石小屋へ。明るいうちにたどり着いたのでひと安心。

30日6時、朝日に照らされた赤い赤石岳を、カメラに収めて下山



千枚岳山頂にて

する。9時30分、樺島ロッジ着。

苦労した3日間だった。遅れて皆さんに迷惑をかけた放しだったのに、先々で待っていてくれた北海道支部の皆さんは、団結力と忍耐力とスケールの大きい登山人であった。菊池リーダーと清登サブは常に私の後ろでサポートし、的確なアドバイスと勇気をくれた。南アルプス南部の、奥深い壮大な赤石山脈の主峰には、別のコースから再挑戦してみたいものだ。苦しいこともあったが、今後に向け身体をつくり直し、気力と精神力をつけたい。

(河西邦彦)

図書受入報告(2013年11月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
柴野邦彦	釣り人たち(水彩画集): Anglers	96p/21cm	プロモビス	2013	著者寄贈
根深誠	ブナの息吹、森の記憶: 世界自然遺産 白神山地	206p/17cm	七つ森書館	2013	著者寄贈
藤原優太郎	山は学校 ぼくの細道: 藤原優太郎随想集	137p/21cm	無明舎出版	2013	出版社寄贈
伊藤フミヒロ(編著)	バックカントリー: スキー & スノーボード/ヤマケイ入門&ガイド	240p/21cm	山と溪谷社	2013	出版社寄贈
平塚人物史研究会(編)	平塚ゆかりの先人たち	76p/29cm	平塚人物史研究会	2013	鈴木利英子氏寄贈
Suzuki, Bokushi	Leben Unter dem Schnee(北越雪譜/鈴木牧之・著 ドイツ語版)	383p/24cm	Eugen Diederichs	1989	モア・ジョイ寄贈
灘高スキー登山部OB会(編)	灘中・灘高スキー登山部 部史 復刻版(第1編・第2編)計5冊		灘高スキー山岳部OB会	2013	発行者寄贈
静岡高校・紫岳会(編)	「紫岳」バックナンバー (創刊号〜第10・11号まで)計8冊		静岡高校・紫岳会	1933〜1952	山本良三氏寄贈

資料映像委員会

アーカイブ映画会『アンデスの氷壁に挑む』

10月3日、映画会を開催した。1962年に早大山岳部が遠征した登山隊に、カメラマンとして同行した近藤隆治会員の報告である。参加者は40名と盛況であった。

登山隊は、「世界で最も美しい氷雪のピークの一つ」とされているネバド・アルパマヨ(6120メートル)の第2登と、ネバド・チュルツプ(5493メートル)の初登攀に挑戦した。まず映画観賞、続いて撮影者と隊員によるトークが行なわれた。概要を報告する。

登山隊のメンバーは、吉川尚郎隊長以下総勢6名で、平均年齢は25歳と若い隊である。遠征予算の厳しい折から、映画制作もスポンサー捜しに走り回り、某テレビ局よりでき映えを見た結果可否を決めるとの話もあり、それを配慮して制作をする計画を練った。

1962年5月28日、大勢の人々に見送られ横浜港から出航。7月6日、登山隊はリマからトラックでワラスへ向かった。そこでポーター2人を雇い、馬とロバ



撮影者ならではの楽しい裏話も披露された

と人間からなるキャラバンがゆつくりと動き出した。

7月18日12時10分、吉川隊長、井口隊員の2名が正面岩壁(平均斜度70度)よりチュルツプの頂上に立った。

7月27日、アルパマヨ挑戦のため出発、標高4300メートルにBCを設置した。

8月2日、第1キャンプへ全員で荷揚げ。いちだんと近くなったアルパマヨは、その鋭い穂先を見せている。ここから氷河との闘いだ。北稜を吉川、村井、近藤、パーティが目指し、南稜を井口、浜野、鍋木、パーティがルートワークをする。北稜は大クレバスに進路をさえぎ

られ、取り付くのが難しいようだ。南稜にルートが見つかったので全力を注ぐことにし、南稜直下、標高5300メートルの雪原に第2キャンプを設置した。

アルパマヨは見る角度によって変化する。槍ヶ岳のように見えたり、美しいヒダが一面に入って見えたりする。登山隊は映画制作にきているのではない。登山にきているのだ。従って行動は待つてくれない。映画制作者は孤独である。穂先が90度に近い斜面をセルフビレイしながら、3分ごとにチェンジバック(携帯用簡易暗室)の中でフィルム交換をしなければならず、大変な撮影であった。

続いて、井口隊員がアタックの様子を語り、「吉川隊長がWの旗を持って登る。次に浜野、村井、最後に鍋木と近藤カメラマンが登った。雪面に鼻をくつつけて登り、頂上は50センチほどの塊で、アルマパヨは最後までとんがっていた」と結んだ。

なおトークの詳細は、当会HP↓日本山岳会の活動案内↓委員会↓資料映像委員会↓アーカイブ映画会へとアクセスするとご覧いただけます。(溝口洋三)

日本山岳会団体傷害保険
加入のおすすめ

加入対象者(被保険者): 日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい!

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

東京海上日動火災グループ代理店 株式会社東海日動パートナーズ東京
団体傷害保険資料請求担当: 藤田 Mail:a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp
TEL.0120-161-808 FAX.0120-161-809

支部



だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

越後支部

山コン at 南葉山(949m)

越後支部では公益事業の一環として、10月13日に「山コン at 南葉山」というユニークな行事への協力支援を行なった。

この企画は、上越情報プレス社主催で、新潟県(児童家庭課少子化対策・保育係)の共催として、「トキメキHeart」にいがた出会いサポート事業」として実施されたものである。橋本支部長の知人を通じて、越後支部に山行引率の協力依頼があり、支部参加者は橋本支部長のほかに、南葉山に詳しい地元七澤恭四郎(支部自然保護委員長)と、サポートとして桐生恒治(支部事務局長)が参加した。

山コンとは、トレッキングで自然を満喫しながら男女の素敵な出会いを楽しむ山行で、最近各地でもいろいろなイベントが企画され

ている。

当日の上越地方は、前日の雨模様から爽やかな秋の日差しとなり、絶好の出会いを予感させる小春日和の天候となった。参加者は、新潟県内外の男女各20名であったが、申し込み人数は2倍以上もあったらしい。

8時30分に南葉山高原キャンプ場に集合した参加者は、当初は男女ともぎこちない雰囲気の中で、不安そうな気持ちで顔を下に向けている状況だった。女性は鮮やかな山ガールスタイルの服装、男性も煌びやかな格好をして気を惹き付けたいという服装できめている。主催者側から挨拶の後、出発前に男女一対一の差し向かいで20組が交代しながら1分間の自己紹介を行ない、打ち解けて和らいだ雰囲気となった。

コースリーダーの七澤会員が、登山ルート説明と諸注意を行なっ

た後、準備体操をして9時40分に出発、木落し坂コースより登り始めた。会話中心のゆっくりとした歩みで、途中3回ほどの休憩をとりながらのんびりしたペースであった。隊列ラストを受け持った橋本支部長と桐生会員は、伐採木を拾って女性参加者のための杖作り

に忙しく動き回っていた。
予定どおり11時30分に全員が南葉山頂上に到着、ここでグループごとに昼食をとる。昼食後は男女各グループに分かれ、制限時間内で交互の話し合いを行ない、意中の人を選定する時間帯である。13時下山開始、14時30分に予定どおり高原キャンプ場に帰着した。

越後支部の協力はここで終了したが、その後、フリータイムでの話し合いと、主催者側の調整でカップリングが行なわれ、なんと20組中8組ものカップルが成約したとのことである。また、参加者に聞いた印象として、自然の中での体験で天候にも恵まれ気分的にオープンになれたこと、非常に気持ちの良い企画であり参加して良かったとの声を聞いた。若者の素敵な出会いのサポートができたことや、山や自然が大好きな若者が多

東京多摩支部

山梨、埼玉、東京多摩の3支部が第2回懇親会を東京・青梅の御岳山で開く

山梨、埼玉、東京多摩の3支部が、9月14・15日、東京・青梅の御岳山で合同懇親会を開催した。あいにく台風18号の影響で大雨となり、予定していた大岳山には登れなかったが、その分、大いに楽しく歓談することができた。3支部合わせ40人(東京多摩24、埼玉13、山梨3)が参加した。

この合同懇親会は2回目だ。どういうわけか雨にたたられる。昨年は埼玉支部が主管し、雲取山で9月に開催しようとした。台風が接近し12月に延期したものの実施できず、翌年4月になって「三度目の正直」のとおりようやく開催できたが、雪に見舞われ、山荘への到着が大幅に遅れた。その反省で

今回は御岳山に会場を設営したのだが、またも雨である。

会場としたのは御師の宿坊「山楽荘」。午後2時に受付を開始した。もう雨が降り出していた。全員そろったところで、片桐御師の話を聞いた。御岳山は、信仰の山として発展してきた。山上にある武蔵御嶽神社は第10代崇神天皇の代に創建されたと伝えられている。詳細不詳。古来、庶民の御嶽詣でが盛んで、「講」という集まりをつくり祈禱師／御師の先導でお参りした。御師の家は一般に開放され、今も宿坊として利用されている。参道には御師の家が数多く並んでいる。

続いて、金邦夫会員の話を聞いた。今年3月まで、20年にわたって青梅警察署山岳救助隊で、山岳救助活動に従事してきた。年間40件ほど救助に出動していたという。東京の山岳遭難は意外に多い。警察庁が毎年6月に全国の山岳遭難状況を発表する。最も多いのは長野県、次いで富山県、北海道などとなるが、東京都は上位にランクされる。ときには7位、9位などとなる。あまり報道されないためか、たくさんの方が気軽に登って



楽しく歓談した参加者

きて遭難する。多摩の山を侮つてはいけない。五日市、高尾警察署と分担して救助に当たるが、青梅が断然に多い。

今年は9月までにすでに37件発生した。遭難は秋に多く、気がかりだという。行方不明のままになっている人もいる。現役のところは、休日を返上して捜索した。どうしても見つからない。行方不明者は、みんな男性だ。中高年で単独登山である。黙って出かける。これでは探しようがない。少なくとも、家族に行く先を言ってほしい。

金会員は多くの事例をあげた。安易に救助を頼まれることも多く

なった。日ノ出山で18人のパーティから「仲間のひとりが歩けない」と出動を要請された。駆けつけてみると捻挫らしい。救助隊員が30分ほど交代で背負って下した。救急車を待たしたが、下へ下りると電車で帰るという。たいした事故ではなかった。どうして仲間が助けてやれないのか。東京の大きな山岳会だったという。金さんは「山ヤのプライドがない」と言った。日本山岳会の会員には、そのような恥づかしいことをやつてもらいたくない。

予定していた大岳山は、その特異な山容から、多摩のランドマークとされている。古書『武蔵通志』は「両総地方にて武蔵の鍋冠山と称して海路の目標とすなり」と記し、東京湾の船上から航路の目標としたことを伝えている。二百名山のひとつである。一度は登ってみたいと楽しみにした参加者も多かったが、やはり中止となった。朝食後、早々に下山した。帰りのJR青梅線は大幅に遅れていた。車両は、自転車並みの速度で走った。来年は、山梨支部の主管で実施する予定だ。

(高橋重之)

福岡支部

九州5支部懇談会開く

9月28～29日、九州5支部懇談会が福岡支部主催で、ホテル・グランティア太宰府を会場にして開催、5支部から70名が参加した。

28日、渡部秀樹会員の司会進行で、14時20分開会。中馬重人・福岡支部長の挨拶。続いて新会長に就任した森武昭会長が登壇され、これからの日本山岳会が目指す方向として、「会員の増強」「若手リーダーの育成」「山の日制定運動」などのほか、入会金の一部を支部

へ還元、支部の事業計画への助成金構想など、支部活性化についても熱く語られた。

次に支部代表による支部近況報告に移り、伊藤久次郎(北九州)、加藤英彦(東九州)、工藤文昭(熊本)、末永軍朗(宮崎)、中馬重人(福岡)の各支部長から支部活動の現状が報告された。

当日の記念講演は、小西信二氏(太宰府市ふれあい館館長)による「宝満山の国史跡指定について」。これは会場近くにある宝満山(829m)が鳥海山・富士山に次いで日本で3番目に山岳信仰に基づく修験道の山として、今秋、国史跡



盛会だった九州5支部懇親会

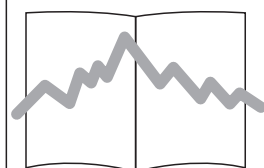
指定に内定したことを受けて行なわれたもので、小西氏の40年間にわたる宝満山の古代山岳寺院史跡の発掘活動への執念がにじみ出た1時間半だった。

夜は、ホテルに併設された天然かけ流し温泉「みかさの湯」に浸かったあと懇親会が開かれ、お酒と料理と歓談を楽しんだ。

29日は記念山行。8時30分にホテルを出発し、「四王寺山歴史ハイキングコース」「宝満山登山コース」「自由散策コース」の3つに分かれ実施。森会長は宝満山を元気に往復し、麓にある「山の図書館」(九州情報センター)にも立ち寄られた。

一時小雨は降ったものの、秋の一日を歴史の趣あふれる太宰府界隈で堪能した集まりであった。

(高木莊輔)



図書紹介

金子民雄・著
『聖地チベットの旅——カイルス・マナサロワール紀行』



2013年9月出版
連合刊 B6判 319頁
定価 2625円

著者は本書のまえがきで「旅の思い出を綴ったものにすぎない」とあつさり扱っているが、とんでもない。

著者は探検家や調査隊などが中央アジアやチベットに入り、書き残した百数十年にわたる探検記録や旅行記、学術調査報告書などに関する文献や資料に精通した、日本でも数少ない知見者の一人である。そればかりかこの分野で自ら執筆活動や翻訳に勤しむ専門家でもある。従って本書の中でも随所に深い著者の思いを読み取ること

ができる好書といえるだろう。

本書は、著者が文献から知り得た多くの知識を紹介しながら、自ら踏査して行く旅程の中で見聞した体験した事柄を、昔と今を重ね合わせながら論じていく視点は興味深く読み応えがある。

本書の第一章・二章、ラサ、シガツェ、ギャンツェの記述は旅行記の範疇を超えるものではないが、チベットの歴史や文化を知りたい旅行者にとっては参考となる点が多い。変貌していくチベットの姿や、終焉を迎えようとしているチベット仏教に対する洞察など深いものがある。

ヤル・ツアンポを遡り、その源流域に広がる聖地について半分余のページを割いている。

もとより河口慧海の足跡を訪ね、聖地全域を見聞しながら過去数世紀、この地を訪れた探検家やイエズス会士の足跡をたどってみたい

ということが念願であったと著者は記しているから、慧海をはじめとする旅行者の記録を引用しながら、この地域の紹介に務めている姿勢は高く評価したい。

優しく好奇心に満ちた著者の目が、至るところで発揮されていることが本書の特徴とも言えよう。川岸で飛び跳ね車底に付着する魚のことなど、未だ秘境といえる部分も残されている。この旅に同道した人たちはさぞ楽しかったであろうとうらやましく思え、私の1985年の遠征を回顧しながら読み続けた一冊であった。

著者の志す聖地の紹介は、今回の旅の動機と深くかかわっていることは当然としても、著者の旅から本書発刊の16年の間に日本人が行なったヤル・ツアンポの2つの源流域の完全踏査、河口慧海の越えた峠や白岩窟の確定調査、ナムナニ(ゲルラ・マンダータ)の初登頂などが著者の綴るそれぞれの箇所です。語られていれば、申し分のない西チベット聖地への旅行記として更なる輝きを増すものと思いきり待っている。

(平林克敏)

『アルプ』の時代

山口耀久・著



2013年10月
山と溪谷社刊
四六判 359頁
定価 3465円

『アルプ』という雑誌があった。その月刊誌(創文社刊)は1958年創刊、1983年に300号で終刊した。30年前になる。25年つづいたが、存続の期間より終刊してからの時間の方が長い。だから、いま40歳代以下の世代はその実体を見たことがないか、その存在を知らないとしてもおかしくはない。25年も30年も、半世紀少し前ならば、若い世代は生命を奪われている一生の年月になる。そういう時間がたつて、その雑誌の生涯を振り返るという作業が編集同人のひとり、山口耀久氏によって実現した。

回顧は、それをするだけの価値のあるものに対しておこなわれる。この雑誌がどういう内容で、どんな雰囲気を持っていたのか、つまり回顧するに値するどのような世界を築いていたのか。

著者はそれを、時代背景、執筆者、反響、遺産などの面から13章にわたって解き明かす。どの章も堅牢な構成と精緻な文章によって読み応えがある。「アルプ」にもっとも近い雰囲気を持っていた戦前の雑誌『山』は3年、実質30号で終刊となった。「形而下的ではない」世界を内容としたが、その点では『アルプ』も同じであった。それが3年30号と25年300号と命に長短ができたのはなぜか。前者は「再生することを期して」終刊したが、後者は再生を期することはなく、「悲痛感などは少しもなく」「使命をはたした、という自負」を持っていった。その相違もまた本書のテーマのひとつである。

この本は読むのに時間がかかる。300号の中から、その長寿を支えた文章(その多くが作品の名に値する)を選び回顧しているから、読む側はそこに立ち戻って紹介作を読みたくなくなってしまふ。そうした反復作業の結果、この雑誌の忠実な読者ではなかった私は、いくつもの宝を見つけた。そして改めてこの雑誌の独自性を確認することになった。山の文芸誌と言われていたが、そういう性格は既存・

長生の他の山の雑誌が持っていない、あるいは持とうとしない特徴である。第五章『歷程』の詩人、第十章『紀行文における虚と実』がそれを明かしている。第五章では、『アルプ』の性格を決めた執筆者群像とその影響の強さがわかる。第十章もまた興味津津。そこで紹介されている例(尾崎喜八による串田孫一の文章批判ほか)は、森鷗外の『歴史其儘と歴史離れ』、あるいは幸田露伴の、紀行・小説での虚と実を論じた『客舎雑筆』にも通じる問題提起で、『アルプ』はこういうことを材料にして書ける性格の

雑誌だったという、みごとな紹介になっている。

終刊300号では大洞編集長に声をかけられて私も「歴史の中へ」と題して寄稿したが、本書を読み終えてみると、30年、本当に歴史の中のものになったのだな、という感慨が深い。そこで書いたことの繰り返しになるが、『アルプ』は歴史の記念建造物になったのであって、歴史の中に埋没したのではない。25年、それは『アルプ』によって山の世界が爽やかな雰囲気を持てた、山登りに文化の香りのしていた年月であった。その一方、『アルプ』を否定的に見る向きがある。しかし、そういう見方も、目の片隅に羨望の色を隠せないでいる。本書は、そういう性格の雑誌が存在したという歴史をみごとに跡づけている。その意味で、実体や存在を知らない世代にも、かつての世界を再確認したい世代にも最適の書と言える。さらに、久方ぶりに山の本の分野で、読むに値する文章力を持つ著作が生まれたことを喜ぶたい。

山口氏は『定本 北ハッ彷徨』(平凡社)出版後、図書委員会企画の懇談会で『彷徨』は「音楽でい

ば」短調だが、長調の明るい、ワルツみたいな文章を書きたい」と語っていた(「山」2000年7月・686号)。本書の造本(本文組体裁・用紙・函・表紙などの装丁)は軽快で爽やか。内容と雰囲気と溶けあつて、著者のその言葉を体現している(装丁・小泉弘)。あわせて評価したい。(大森久雄)

『藤田弘基 追悼 星降る彼方に』 茂市久美子・発行



B5判 241頁
(カラー48頁 本文193頁)
非売品

写真家の藤田弘基氏の追悼集。ヒマラヤを中心にした山岳写真だけではなく、蒸気機関車、チベットとガンダーラの仏教美術、高山植物、星空など幅広いテーマを追った藤田氏の35冊の著作が紹介される。さらに著作に添えられた文章、友人の惜別の辞、カラーグラフィが続き、在りし日の藤田さんの姿、主要な業績が浮かび上がる構成になっている。

ヒマラヤの荘厳さ、神聖さなど

を求める写真家が多いなか、藤田さんは、それだけでなく、アッサムからアフガンまで続く大山脈が見せる、さまざまな表情を追求した作家だった。

中学時代から登山に夢中になりながらも、最初の作品は『栄光の蒸気機関車』(1976年刊)。機関車の汽笛に喜びや悲しみを覚え、鋼鉄が生き物のような豊かな表情を見出している。ヒマラヤの高峰群とそこに住む人々、文化にも深い関心を寄せた藤田さんの、多面的で豊かな感性が、初めての本からもうかがえる。

ほかに例を挙げれば、『ヒマラヤ満天星』、『星明かりの秘境 カラコルム』などには、星空に浮かぶ高峰群が叙事詩のように美しく表現されている。偶然出会ったダライ・ラマ十四世との交流から始まり、チベットの秘宝を描いた作品群へと続く流れも興味深い。

著作に関する文章を時系列で集大成したことによって、弟子をとらず、グループにも属さなかった誇り高き写真家・藤田弘基さんの人柄、仕事への情熱が伝わってくる。

共著も多い夫人の童話作家、茂

市久美子さんが発行。惜しまれ、早過ぎる死ではあったが、愛する人に、このような素敵な追悼集で送られる藤田弘基さんは幸せな写真家である。

市販されてはいないが、蒸気機関車を愛し、ヒマラヤの自然、文化に傾倒した写真家の魂の軌跡は、日本山岳会の図書室にふさわしい本である。

(永田秀樹)

*

問合せ|| デナリパブリッシング
社(森田洋) 電話03(5213)8125



平成25年度第7回(11月度)理事会 議事録

日時 平成25年11月13日(水)19時～
21時

場所 日本山岳会集会室

【出席者】森会長、黒川・古野各副
会長、高原・吉川・佐藤各
常務理事、大槻・落合・勝
山・川瀬・直江・野口・山
田各理事、浜崎・吉永各監
事

【欠席者】節田副会長・山賀理事
【オブザーバー】柏編集人

【審議事項】

1・平成25年度秩父宮記念山岳賞
推薦について(黒川)

10月25日に開催された秩父宮記
念山岳賞審査委員会で2件(3名)
が推薦された。(承認)

・立山連峰における越年性雪渓研
究及び日本初の現存氷河の発見
飯田肇(当会会員)・福井幸太郎
(非会員)

会務報告

・日本人初8000m峰14座完全
登頂

竹内洋岳(元会員)

2・旅費等の寄付に関する取扱い
について(吉川)

日本山岳会会員が会の事業のた
め個人が負担して支出する旅費等
を会への寄付金とする場合の取り
扱いについて定めた(会員からの
旅費等の寄付に関する要領)。

3・入会希望者について(高原)
14名の入会希望者があった。
(承認)

【協議事項】

1・上高地山研水対策について
(大槻)

水道導入に伴う上高地右岸水道
組合、工事業者、関係省庁との打
合せ等について協議した。

【報告事項】

1・各PT・WGから、現在まで
の進捗状況等についての報告

(1) 110周年記念事業(佐藤)
(2) 山の日制定PT(森)
(3) 会員増強・財政基盤検討P
T(黒川)

(4) ルーム検討WG(高原)

(5) 支部活性化PT(森)

2・財務関係の報告(吉川)

(1) 家族登山普及WG

(2) YOUTH CLUB関係

(3) 高尾の森づくりの会の会計

(4) 中間の内部監査の実施(12月
13日予定)

(5) 平成26年度事業計画と予算

3・「当会への寄付の税制優遇措
置」について(吉川)

内閣府から10月15日付で要件を
満たしていることの証明通知があ
った。

4・日本山岳協会と、今後の連絡
協議に関して(高原)

11月19日に打合せを行なう。

5・新入会員オリエンテーション
について(高原)

新入会員26名が参加し、10月26
日開催された。

6・青森支部創立20周年記念式典
について(高原)

東北・北海道地区集会在、10月
12・13日にむつ市で開催され、約
1000人が参加した。

7・第29回全国支部懇談会につい
て(佐藤)

10月20・21日に静岡市で開催さ
れ、約200名が参加した。

8・「沢登り同好会」を同好会に登
録(代表者直江俊武)した。(高原)

9・パソコンプロジェクト1台
の購入を決めた(高原)

10・日本山書の会から「山岳」掲載
画のコピー転載許可願いがあり承
諾した(高原)

11・長野県遭難防止対策協会から
「山岳遭難防止アドバイザー」設置
の通知があった(高原)

12・日本山岳会山岳保険について
(吉川)

会報「山」の広告面を拡大するな
ど広報を強化する。

13・海外登山基金による助成を受
けた慶応大学の中国四川省横断山
脈登攀隊が4つの未踏峰に初登頂
した(吉川)

14・2013・2014年役員・
委員会名簿を発刊した(高原)

15・平成25年度の新永年会員は46
名となる(高原)

16・学生部主催の第50回マラソン
大会について(古野)

11月9日に皇居周辺で開催され、
約1200人が参加した。

17・第17回全国山岳博物館連絡会議について(勝山)

11月9日に開催され、全国から7博物館が参加した。

18・『山』11月号について報告があった(柏)

【今後の予定】

1・年次晩餐会12月7日(土)

2・支部長会議12月7日(土)10時30分

3・日本山岳文化学会11月16日(土)17日(日)

4・植村冒険館展示「冒険家の押入れ」10月25日(金)1月19日(日)

5・日本ヒマラヤ協会2013年華甲望年会12月14日(土)18時

6・日本勤労者山岳連盟望年会12月7日(土)18時

ルーム目誌 11月

1日 総務委員会

5日 図書委員会 スケッチクラブ

6日 常務理事会 集委会委員

YOUTH CLUB

山の自然学研究会

家族登山普及WG YOUTH CLUB

8日 総務委員会 海外委員会

九五会

9日 全国山岳博物館等連絡会議

11日 公益法人運営委員会 スキークラブ

12日 山岳研究所運営委員会 スケッチクラブ

13日 理事会 休山会 山想倶楽部

14日 フォトビデオクラブ みちのり山の会 山岳地理クラブ

15日 総務委員会 YOUTH CLUB

16日 フォトビデオクラブ

18日 総務委員会 資料映像委員会 集委会委員

19日 00会 支部活性化PT スキークラブ

20日 三水会 青年部 つくも会

21日 山の自然学研究会 科学委員会 YOUTH CLUB

22日 家族登山普及WG

25日 総務委員会 フォトビデオクラブ YOUTH CLUB

26日 DM委員会

27日 自然保護委員会 麗山会

28日 YOUTH CLUB

総務委員会 学生部 山遊会 スキークラブ 公益

法人運営委員会

29日 総務委員会 110周年記念事業実行員会

30日 総務委員会

会員異動(11月分)

11月来室者 552名

阿部和行 (4498) 13・11・11

守山進太郎 (5331) 13・10・19

湯口康雄 (6523) 13・11・26

高並 勉 (7632) 13・11・12

一山 了 (8397) 13・11・6

梁取静吾 (8592) 13・11・27

袴田通孝 (10512) 13・11・20

退会

田沼健司 (7496) 埼玉

齊藤冬喜 (9145)

荒井光夫 (12008)

小原勝三 (12401)

木曾萬喜治 (14308) 熊本

福田幸子 (14534)

平成25年度(後期)

「海外登山基金助成対象登山隊」募集

困難を求めている挑戦、発想の新しさ、夢多い計画など、ユニークな登山計画を支援します。奮ってご応募ください。

●対象 平成26年2月～平成26年7月末に海外の山へ出発する登山隊

●申込締切 平成25年12月31日

その他詳細は、<http://jac.or.jp/event/post-778.html>

海外登山基金助成対象登山隊審査委員会

日本山岳会蔵資料紹介 No.8

[資産番号] 00481～00500
[資料名] 堀田弥一の遺品
[部門名] 書簡、ネガフィルム
[寄贈者] 立教山友会
[受入日] 2011年4月



堀田の日記



①休憩する隊に集まる村人



②ナムルからサルティコーラへ



③ガネッシュのBCより望むスリンギ・ヒマール

前号に引き続き堀田弥一より寄贈された資料より、日記の一部とオリジナル写真を紹介する。

サマ部落での日記「4月6日 …早朝より沢山のチベット人が集まってきた。……昨晚傳令に來た使者……途中ローにて投石その他の迫害を受けた由、一刻も早く安全地帯へ引き上げるべき……4時頃、村山君が来て一切が明白になった。サマに入ることは出来ない……シャルコーラの奥に住むスーパーへの連絡を至急とることになった」。「4月14日 スーパーを中心にサマ側と遠征隊側が会談することになった。サマ側はどうしても譲らず……協議の結果、ガネッシュ・ヒマールに行くことに決定した。サマ側が拒否する理由は……」と詳細が続く。そして新たな目標の山を目指すも第2のサマ事件が発生しそうなこと、ガネッシュへの挑戦から撤退にいたるまでが記されている。

堀田は帰国に際し、遠征が失敗に終わったことで一敗塗地になるのではと苦しんでいたようだ。それは、妻に宛てた手紙から察することができる。

マナスル遠征で撮影したオリジナルネガ(60ミリ×45ミリ)256枚も寄贈されている。カルカット、カトマンズ、ニヤック、ナムル、サルティコーラ、ベースキャンプ、ドマンなどで撮影したもので、当時を知るうえで、歴史的に価値あるものであろう。①～②の写真はキャラバンの様子、③はスリンギ・ヒマール。

この時代の遠征隊は国を挙げての大プロジェクトであった。それぞれがそれぞれの立場で、大きな役割・期待・プレッシャーを背負いながら山と向き合っていた。そして、その時代があって今があるということを、これらの資料が教えてくれる。

なお、日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→資料映像委員会→所蔵資料紹介のページへアクセスすると、「会報ページそのもの」を拡大して見るができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください。✉jacshiryu102@jac.or.jp (資料映像委員会)

◆編集後記◆

●先日、会報編集委員会を開いたところ、10人全委員の出席があった。JACの長い歴史があるからこそ、積み重ねを受け継ぐことができた魅力と、若手会員たちが吹き込む新しい風をいかに融合させるか。それは紙面展開だけでなく、会全体の課題でもある。ある委員は、「もっとユーモラスに書いてもよいのでは」と。会報作りにもいろいろな方向性と多様な手段がありそうだ。

●今月号は、私が晩餐会後からネパール出張に出ているため、ほかの委員、担当理事が編集と校丁の作業をしてくれています。来年は、編集委員会はもちろんのこと、会員の皆さんが、より一層積極的に参加してもらえような会報作りを考えたいと思います。よい年をお迎えください。

(柏澄子)

日本山岳会会報 山 823号

2013年(平成25年)12月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 森 武昭
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社